

ルンちゃん・シュンちゃん

翻訳ってすごいと思う。素人の私はあこがれる。翻訳では、原作の意味と雰囲気を保存しつつ、わかりやすく訳すという超人的な力が発揮されるのだ。英語の「yes」の訳だつて、「うん」「ええ」「はい」「はっ」といろいろある。

魯迅の「故郷」の場合、原作は中国語だ。中国語には日本語のような敬語がない。竹内好訳では、少年時代のルントウは「今は寒いけどな、夏になったら、おいらとこへ来るといいや」のように普通体で話す。これが、再会の場面では「これが五番目の子でございませう」となる。敬語表現が両者の間の壁を浮き立たせる。一方、一九三三年の井上紅梅訳では、同じ箇所が「今は寒くていけません、夏になったらわたしの処へいらつしやい」となっている。ルントウ少年は敬語で話すのだ。「旦那様」と呼ばれた後の部分は、竹内訳では「悲しむべき厚い壁が、二

人の間を隔ててしまったのを感じた」となっている。その現場で隔たったようなニュアンスもある。二〇〇九年の藤井省三訳では「二人のあいだはすでに悲しい厚い壁で隔てられているのだ」となっている。原文の「已經（すでに）」という言葉を反映して、隔てられている状態がすでに成立しているという訳だ。さらに、もしこの部分を「すでに隔てられていたのだ」とすると、そのことに改めて気づくような感じになる。

「十一、二歳の少年」であるルントウと「まだ十歳そこそこ」の主人公。しかし、原文では再会の場面でのルントウは「閨士哥（ルントウ兄ちゃん）」と呼びかけられていて、ルントウが年上のようだ。竹内訳では「ルンちゃん」だが、藤井訳では「閨兄ちゃん」。ちなみに井上訳では「閨士さん」。また、主人公の子ども時代の呼ばれ方（迅

哥儿）は、竹内訳と井上訳では「シュンちゃん」だが、藤井訳では「迅坊っちゃん」。母が昔のように、と言う呼び方だが、留学生に聞くと、この表現には親しみのほか、「坊っちゃん」という感じの軽い敬意もあるという。どう訳すかで、子ども時代での身分差の認識が違ってくる。作品世界は微妙に変わる。

表される内容と表現形式の対応にはさまざまな可能性がある。翻訳ではないが「走れメロス」も「走らんかいメロス」（そう言いたくなる？）という題名だったら作品の雰囲気は違う。「故郷」だつて「ふるさと」とすれば「兎追いしゅ」の連想で違ったニュアンスになる。翻訳でも創作でも、言語表現の世界は実に奥深いのだ。ね、ルンちゃん！ シュンちゃん！

早稲田大学教授

森山卓郎